

2022 AUTOBACS SUPER GT Round 8  
MOTEGI GT 300km RACE GRAND FINAL



## 2022 AUTOBACS SUPER GT Round 8 MOTEGI GT 300km RACE GRAND FINAL

開催地：モビリティリゾートもてぎ（栃木県）／4.801km

11月5日（予選） 天候：曇りのち晴れ  
コースコンディション：ドライ 観客数：13,500人

11月6日（決勝） 天候：晴れ  
コースコンディション：ドライ 観客数：26,000人

# PRIUS GT、11年目の集大成ならず。 最後はまさかのエンディングに……。

全8戦で争われるスーパーGTは、いよいよ最終戦を迎えた。

「MOTEGI GT 300km RACE GRAND FINAL」が、モビリティリゾートもてぎで開催された。

2台体制で挑むaprが、コンビ結成4年目の嵯峨宏紀選手と中山友貴選手に託すのは、

お馴染みのTOYOTA GR SPORT PRIUS PHV (ZVW52) 「apr GR SPORT PRIUS GT」。

タイヤは引き続き信頼と実績のブリヂストンを使用する。

前回のオートポリスでは、予選19番手から15位でゴール。

ストレートパフォーマンスを欠き、コーナーで前を行く車両との間隔を詰めても、

続くストレートで引き離されてしまう現状では、これが限界でもあった。

さまざまなメイク&トライを重ね、コーナーのボトムスピードは優勝した昨年のレースを上回っていたというのに。

これ以上の進化は望めないと判断し、断腸の思いではあるが、

今回のレースを「apr GR SPORT PRIUS GT」のラストランに……。

2012年からの導入でチームにも、ドライバーにも思い入れはある。

有終の美を飾るべく、ベストを尽くす。

最終戦の舞台、モビリティリゾートもてぎはストップ&ゴーが繰り返されるレイアウトで知られ、タイヤにかかる負担はそう大きくないものの、ブレーキを大いに酷使する。

終盤になってブレーキが悲鳴を上げて、ペースダウンを余儀なくされることも少なくないほどだ。

ストレートは決して長くはないが、コーナー立ち上がりの加速に勝れば、より有利にレースを戦えることもあって、パワーサーキットの性格も実は兼ね備えている。

今回の公式練習では中山選手が中心となって、セットアップが進められていった。

最初のスピードチェックで記録されたのは、1分48秒149。

だが、その時点でトップは、すでに1分46秒台に到達。その後、さまざまな要素がトライされることによって、セッション中盤には1分47秒968を記録するまでとなるが、まだ十分ではない。

尚も様々なことが中山選手によって試されていくが、大幅な改善は果たせずじまい。

そのタイムがセッションベストとなり、23番手に甘んじるも、

最後の専有走行を含む終盤に、交代した嵯峨選手が1分49秒972を自己ベストに、

コンスタントにタイムを刻んでいたことは、バランスも悪くない状況の証明でもあった。

その後に行われたFCY（フルコースイエロー）テストの時間も、

嵯峨選手、中山選手の順で時間を残すことなく走行し、マシンは最後まで詰め続けられていた。

今回、「apr GR SPORT PRIUS GT」は予選 Q1 を B 組での走行となり、アタックは中山選手が担当した。気温は公式練習と変わらず 16 度、路面温度は 2 度上がって 27 度。タイヤのレンジは外れていない。それでもウォームアップはじっくりと行われて中山選手は計測 3 周目からアタックを開始。1 分 47 秒 746 を記した後、1 分 47 秒 229 を記してチェッカーを受けることに。しかし、トップは 1 分 45 秒台に叩き込んでおり、Q1 突破のボーダーラインにもコンマ 5 秒及ばず。11 番手に終わって、決勝には 21 番グリッドから臨むこととなった。





### 嵯峨宏紀選手

このレースウィークの前に、もてぎでタイヤメーカーテストして乗り込んでいますが、その時から比べたらタイムは良くなっています。  
そうはいつでもトップとのタイム差は大きいですし、マシンパッケージ的にも限界までは詰めれたと思います。ある程度、想定していた結果ではありますが、コーナーを立ち上がり重視で走っても、ストレート一本で大きく離されてしまっては、もうどうにもなりません。  
とはいえ、プリウス最後のレースですし、結果を出すのはこのパワーでは難しいかもしれませんが、最後やっぱりきれいな状態で終われるように、明日は行きたいと思います



### 中山友貴選手

今回のレースでプリウスが最後ということなので、本当に思い残すことがないように挑んでいるんですけど、やっぱり性能調整が変わってから、すごく厳しい戦いを強いられていて、ひとつひとつ改善しようとやってきましたが……。  
トップとの差はありますが、秒単位で改善できているのは、作業を着実にやっていった結果だと思っています。Q1 を通るにはだいぶ足りませんでした、やるだけやったかなという感じです。



### 金曾裕人監督

悪くないですよ、出すもの出しているし、車のセットも良くなっていますし。  
でも、ノーウェイトなのに最高速が 10km/h 以上、こんなストレートの短いサーキットで差がつくような状態では、もうお手上げです。厳しい今の規則の中でプリウスとしては、元気に走っています。  
アタックもノーマスだし、中山選手にいろんなセットを取ってもらって、ある程度、集大成に近いところでのアタックだったと思います。  
でも、これが今の限界。タイヤもすごく良かった。1 点獲ることが、ラストランの目標です

決勝レース (63周) 11月6日 (日) 13:00~



決勝レースは小春日和の、穏やかなコンディションのもとでバトルが繰り広げられた。

直前に行われたウォームアップは、スタートドライバーを務める中山選手が走行。

決勝セットに改められ、1分49秒222をベストに、1分49秒台をコンスタントにマークしていただけに、感触は悪くない。淡々と走って、チャンスを待つ。しっかり走り続ければ、自ずと結果もついてくるはずだ。

実際、スタート直後の大渋滞を巧みにすり抜け、「apr GR SPORT PRIUS GT」は3ポジションアップとなる18番手からレースを開始。5周目には一台をかわすなど順調ではあった。

そんな中、チームメイトの「apr GR86 GT」が8周目の3コーナーで、GT500車両に追突されて、姿勢を乱したところを、さらに後続車両にぶつけられてリタイアする事態が！

いったんはFCY提示も、ストップ車両から液体が漏れていたため、処理が必要ということで、すぐにセーフティカー(SC)ランに切り替えられる。

やがて処理も完了し、隊列も整えられて、間もなくSCランも終了……というタイミングで、目を疑うような光景が飛び込んでくる。

ホームストレートで「apr GR SPORT PRIUS GT」が、前を走る車両に激突！

コース上にパーツの破片が散乱している状態で、2台がストップしていたのだ。

両車のドライバーに怪我がなかったのは何よりだったが、とてもレース続行可能な状態ではなく……。

嵯峨選手に最後のバトンを託すことなく、「apr GR SPORT PRIUS GT」はラストランをリタイアで終えることとなった。

### 嵯峨宏紀選手

残念です。本当にプリウスのラストランだったので、後半乗る予定でしたが、結果はどうあれ、乗って終わりたかったというのが、まあ正直なところですけど……。う〜ん。ちょっと、何とも言えない複雑な心境ですね。



### 中山友貴選手

トラブルではなく、SC が先頭に追いついた隊列の渋滞の後方で、僕が止まりきれないでぶつかりました。クラス分けされて、レース再開まで間もなくという状況に差し掛かるところで、前後の順位の確認や、GT500 のトップから邪魔しちゃいけない車の確認をしていた時、少し前が加速したタイミングで後ろの様子を見ていて。パッと見たところで前がかなり減速していたので、止まりきれずぶつかってしまいました。相手のチームには本当に申し訳なく思います。



### 金曾裕人監督

大好きだったプリウスのラストレースをきれいに飾れず、プリウスにも申し訳なくて仕方がない。そして、本年もサポートしてくださった方々、応援してくれたファンの皆さんに、申し訳なく思います。ドライバーふたりに怪我がなかったのは良かったです、完全に我々のミスとしか言いようがありません。そして、チームマツハの関係者の皆様に、心からお詫び申し上げます。本当に申し訳ありません。また、規則的にもハイブリッド車両、GT300 規則車両が劣勢を強いられた今シーズンを温かく応援下さった皆様に御礼申し上げます。来季に関してはまったく違った新しいパターンで、次の時代にチャレンジしますので、ご期待ください。

